

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 17 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530670

研究課題名（和文） 自己と他者の特性情報集合間の認知的リンクに関する研究

研究課題名（英文） Cognitive linkage between trait information about self and other

研究代表者

福島 治（FUKUSHIMA OSAMU）

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：40289723

研究成果の概要（和文）：

自己と親しい他者は、頻繁に相互作用を行っていることから、人が保持する両者の行動特性情報には密接な関連があるとする仮説を検討した。いくつかの実験により、友人の特性は、友人と一緒にいるときの自己の特性と関連があり、親の特性は、親と一緒にいるときの自己の特性と関連があるという結果を得た。自己概念は対人関係の中で社会的に構成されるとする考えに実証的根拠を提供した。

研究成果の概要（英文）：

This study examined the hypothesis that trait information about the self in relation to a close other would be linked with trait information about the corresponding other in memory representation because of frequent daily interaction between self and the close other. Several experiments revealed that trait information about a friend closely related to trait information about the self with friend. Similarly, trait information about a parent related to those about the self with parent. This study demonstrated the idea that self-concept is constructed socially in interpersonal relationships.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：社会心理学

キーワード：特性情報、社会的自己、人物表象

1. 研究開始当初の背景

自己の成立基盤にとって他者が鍵になることは古くから指摘されてきたことだが、その実証的な証拠は必ずしも十分でなかった。近年の社会的認知研究における研究技法の発展によって、その証拠が集積されつつあり、本研究はその流れの1つとして開始された。

2. 研究の目的

個人が保持する自己と他者の認知表象については、自己表象のほうが他者表象に比較して全般的に豊かであり、状況特定の内容が多い（Prentice, 1990）といったように、表象の内容や量の違いが検討されてきた。しかし、最近の研究は、他者表象の活性化によって、その他者に関連する自己表象の利用可能性が増大する（Hinkley & Andersen, 1996）など、2つの表象の関連性を扱うようになって

てきた。本研究は、これらの表象に含まれる自他の行動特性概念に焦点化して、自己と他者の特性概念間の認知的リンクを明らかにすることが目的であった。特定の条件の下で読み出される自己概念は、作業自己概念 (Markus & Wurf, 1987) と呼ばれる。本研究のねらいは、作業自己概念が読み出される条件としての他者の特性概念の活性化について検討することであった。

James(1890)が「社会的自己」を概念化して以来、人は相互作用の相手に応じて、柔軟に自己の行動を制御すると繰り返し指摘されてきた。この制御においては、自己表象だけでなく、相互作用相手の他者表象も同時に活性化されると予見されるが、こうした認知的活動を解明するための試みは、長い間進展しなかった。しかし、この10年ほどの間に、関係性スキーマ (Baldwin, 1992) や関係自己 (Andersen & Chen, 2002) のような理論的概念が提出され、対人関係を反映した自己知識の基盤が議論され始めた。これらの理論は、自己表象の一部は他者と結ぶ関係の中で構成されるがゆえに、それが他者に関する表象と結びつく点で共通しており、関連する実証研究は、他者表象の活性化が、自己評価や自己知識といった自己表象の活性化をもたらすことを示してきた (Baldwin & Holmes, 1987; 福島, 2003; Hinkley & Andersen, 1996)。

こうした進展はみられたものの、これらの研究で扱われた他者表象は、他者の視覚的イメージや表情の手がかりのような視覚的情報であった。しかし、他者表象には、その人物の行動特徴を要約した特性概念のように、豊かな意味を持つ情報が含まれている。相手によって変化する自己の柔軟性に関する認知基盤を理解するためには、他者に関する特性概念と自己に関する特性概念との関連こそを明らかにするべきであろう。

このとき見逃せない点は、異なる他者の特性は様々であるために、相互作用の内容が他者の特性や役割に依存して変化する点である。この点と、自己の特性概念が過去に経験した他者との相互作用を反映する点をあわせて考えると、人々は異なる他者との異なる相互作用を反映した自己に関する特性概念のサブセットを構成すると予測される。

これをモデル化した先駆例として、Kihlstrom & Cantor(1984)は、文脈特定の自己概念を含む連合ネットワークモデルに言及した。そこでは「他者という自己」の下位構造として、例えば、「父という自己」、「母という自己」、「配偶者という自己」がリンクしており、それぞれは、各他者と構成する状況内の複数の観察から抽象化された自己の表象であるとした。

また、対人相互作用における過去の行動が

自己と他者の特性概念に反映されるとすれば、他者を条件とした自己の特性概念は、その形成や更新の過程において、他の他者ではなく、常にその相互作用のパートナーである他者の特性概念と、同時に繰り返し使用されてきた履歴を有しているであろう。したがって、他者を条件とした自己の特性概念は、他の他者ではなくて、その他者の特性概念の使用によって利用可能性が高まるであろう。つまり、特定の他者の特性概念とその他者を条件とした自己特性概念の間には、他から独立したユニークな認知的リンクが構成されると考えられる。

これらの議論から、本研究では、次の3点の検証を目的とした。

自己の行動特性概念は、他者を条件としたサブセットとして分化しているであろう。

それらの自己の特性概念は、各々の条件となっている他者の特性概念と認知的にリンクしているであろう。

ある他者の特性概念は、その他者を条件とした自己の特性概念の利用可能性を高めるが、別の他者を条件とした自己の特性概念の利用可能性は高めないであろう。

3. 研究の方法

特定の他者の特性概念とその他者を条件とした自己の特性概念との間の認知的リンクを検討するために、課題促進パラダイム (Klein, Loftus, Trafton, & Fuhrman, 1992) を応用する実験を計画した。実験参加者に連続する2つの課題として初期課題と標的課題の遂行を求めるこのパラダイムは、もし初期課題の遂行時に、標的課題の遂行に必要な情報が利用可能になるならば、標的課題の遂行に要する時間が短縮するはずであると前提する。

初期課題を他者の特性判断、標的課題を他者を条件とした自己の特性判断とするとき、もし他者の特性概念とその他者を条件とした自己の特性概念の間に認知的リンクがあるならば、初期課題において、ある他者Aの特性概念を使用するときには、その情報と繰り返し同時に利用されてきた履歴をもつその他者Aを条件とした自己の特性概念の利用可能性が高まるが、そうした履歴を持たない別の他者Bを条件とした自己の特性概念の利用可能性は高まらないはずである。したがって、標的課題としての他者Aを条件とした自己の特性判断の反応潜時は、初期課題が他者Aの特性判断であったときに、他者Bの特性判断であったときよりも短いであろう。また、逆に、初期課題において、ある他者Aを条件とした自己の特性概念を使用するときには、その情報と繰り返し同時に利用されてきた履歴をもつ他者Aの特性概念の利用可能性が高まり、別の他者Bの特性概

念の利用可能性は高まらないはずである。本研究では、上述の論理に基づいて実験を行った。

実験は、初期課題で、他者に関する事物関連判断をコントロール課題として含んでいた。特性情報間のみリンクがあるならば、同じ他者に関する判断であっても、事物との関連性を判断したときは、標的課題に対する促進効果は観察されないと期待した。

事物との関連性判断とは、「マフラー」、「洗濯機」、「鏡」といった事物を表す名詞に対して、他者や自己のおよその使用頻度から関連性の判断を求めるもので、頻度が多いと感じられるときには関連あり、頻度が少ないと感じられるときには関連なしという判断を求めるものであった。

実験デザインは、初期課題タイプ（2：特性判断・事物関連判断）×初期課題（2：親子関係・友人関係）×標的特性判断（2：親子関係・友人関係）×順序（他者判断先行・自己判断先行）の被験者内計画であった。他者判断先行条件では、初期課題で親（父 or 母）または他友人に関する判断を、標的課題で親または友人を条件とした自己の特性判断を行った。自己判断先行条件では、初期課題で親または友人を条件とした自己の判断を、標的課題で親または友人の特性判断を行った。

4．研究成果

実験結果は、自己と他者の特性情報にリンクがあると仮説に支持的であった。友人の特性判断をした後では、友人の事物関連判断をしたときや、親の特性判断や事物関連判断をしたときよりも、友人を条件とした自己の特性判断が促進された。また効果は弱かったが、親の特性判断をした後では、同じ親の事物関連判断をしたときや、友人の特性判断や事物関連判断をしたときよりも、親を条件とした自己の特性判断が促進された。

図は、本研究の実験結果である。これらは、初期課題が他者、標的課題が自己に関する判

断である試行と、逆に初期課題が自己、標的課題が他者に関する判断である試行を共に含む実験であった。初期課題が特性判断であった左パネルでは、標的課題の特性判断の促進効果が見られており、初期課題が事物関連判断であった右パネルでは、標的課題の特性判断は促進されていない。

ある他者の特性判断は、その他者と対応する自己の特性判断を促進したが、別の他者の特性判断は促進しなかった。この結果は、自己の特性判断の際に、どのような条件（他者）を考慮するかによって、人々が異なる情報を参照していることを示唆しており、自己の特性情報のサブセット化と自己と他者の特性情報のリンクの存在に支持的な証拠である。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

Fukushima, O. and Hosoe, T. 2011 Narcissism, variability in self-concept, and well-being. *Journal of Research in Personality*, **45**, 568-575

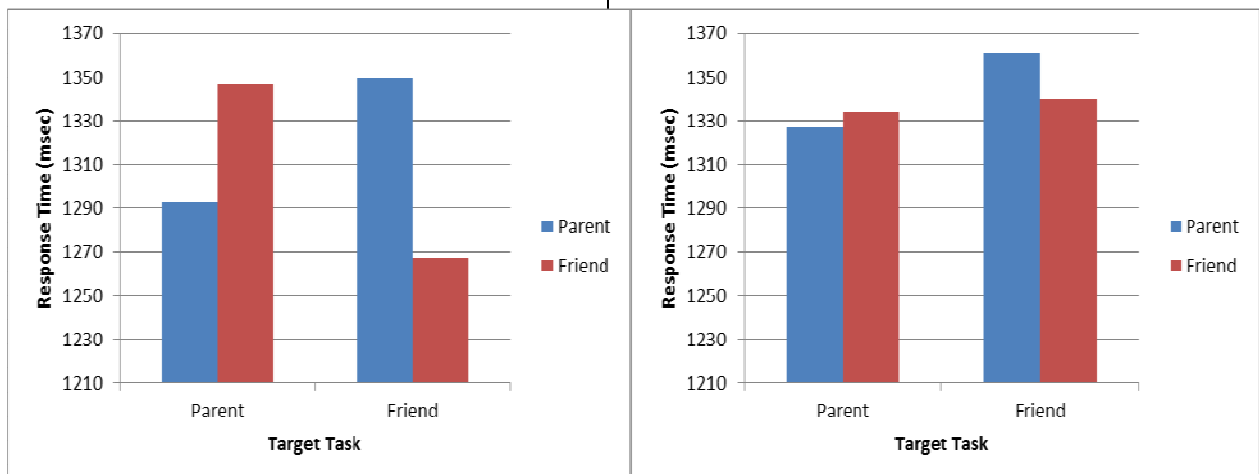
〔学会発表〕（計5件）

福島 治 成績予測における自己愛者の自己高揚 日本社会心理学会第53回大会 2012年11月17日 筑波大学

福島 治 多特性多方法（MTMM）データとしての多面的自己概念の分散の分割 日本パーソナリティ心理学会第21回大会 2012年7月7日 島根県民会館

福島 治 対人イベントの正負混在が自己愛と自己概念変動の関連に及ぼす効果 日本社会心理学会第52回大会 2011年11月3日 名古屋大学

Fukushima, O. Cognitive linkage between trait information about the relational self and other. European Congress of Psychology, 2011.7.5, Istanbul Congress and Exhibition



Center, Turkey.

福島治 自己愛と不安定な役割自己概念：NPI と特性評定の役割間偏差及び時点間偏差の関連 日本社会心理学会第51回大会 2010年9月17日 広島大学

〔図書〕(計1件)

福島治 自己と他者の曖昧な境界 栗原隆(編)世界の感覚と生の気分 ナカニシヤ出版(pp.223-243)2012年3月

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福島 治 (FUKUSHIMA OSAMU)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：40289723

(2) 研究分担者 なし

()

(3) 連携研究者 なし